

25 障害者の地域での快適な生活に対するインフォーマルなサポートの役割その1

研究所障害福祉研究部 丸岡稔典

近年、一般化しつつある市場原理に基づく公的なサービス提供は、身体介護や家事援助等の手段的なサポートを障害者一般に規格化された形で効率的かつ安定的に提供することで、家族に依存した介助状況を改善し、障害者の自立と社会参加を促進するとされてきた。しかし、障害者の地域での快適な生活を実現する上では、個々の障害者の状況やニーズに即応した柔軟な手段的なサポートや障害者の自己否定観を軽減するための情緒的なサポートの提供が必要であり、サービス提供の課題として存在している。本研究では、既に先行して地域で比較的快適に生活している世田谷区在住の肢体不自由者を事例として取り上げ、公的サービスと非専門的かつ友人や地域住民、家族等により制度や契約の枠組みにとらわれずなされるインフォーマルなサポートの利用状況とその生活への影響を分析する。そして、この課題の解決のために有効なインフォーマルなサポートを市場原理に基づくサービス提供と組み合わせるあり方を検討する。調査は2007年8月～11月にかけて約2時間の聞きとりを肢体不自由者8名に対して実施した。

その結果、生活状況として1) 多くの人は他人介助者を用いて生活を自己管理していること、2) 仕事や買い物等による外出は多いが、友人宅への訪問頻度は低いこと、3) 「思い通りの生活」・「自分らしい生き方の確立」・「自分だけの空間」・「人との出会いの場」が生活の快適さを構成する重要な要素となっていることがわかった。また、公的サービスの利用状況として1) 多くの人が居宅介護サービスを最大限利用していること、2) その問題点として時間数の不足・支給金額の減少・資格制度による介助者募集の困難さ、利用時の融通のきかなさを指摘していること、3) 地域医療の充実が望まれていることがわかった。加えて周囲との人間関係とインフォーマルなサポートの利用状況として、1) 居宅介護サービスで自ら選んだ介助者を利用している人は介助者から手段的なサポートと併せて情報提供や相談などの情緒的なサポートを受けていること、2) 介助者や地域で生活する障害者が友人となっている人が多く、情報提供や介助者の紹介、また情緒的なサポートを友人から受けている人が多いこと、3) 地域から直接的支援を受けている人は少ないが、地域住民との交流により自分の存在を周囲に理解してもらうことを期待している例がみられること、4) 両親・きょうだいによる直接的支援はほとんどみられないが、物理的距離をとることで良好な関係を形成している例がみられることがわかった。

以上より、1) 多くの人は公的サービスにより手段的なサポートを得て「思い通りの生活」を実現しているが、介助者や友人等によるサポートを通じて手段的なサポートを柔軟に利用することが可能となっていること、2) 介助者による情緒的な支援や地域住民との交流が「自分らしい生き方の確立」に寄与していることが示唆される。今後は、事例の追加と計量的調査を通じて本研究の知見を深めると同時に、制度的影響や世代差を踏まえつつ新たに地域生活を模索する若年障害者層に対してその有効な支援方法を検討する予定である。当面の課題として公的サービス提供の過程に障害者と介助者または健常者との関係形成を促進する仕組みが必要である。